

金六拾兩
 上魚屋町 井筒屋庄右衛門
 銀貳拾五枚
 代壹貫七拾五匁 木屋町 伊勢屋藤四郎
 金五拾兩
 梶木町 播摩屋五郎兵衛

右者大坂表中分町人御冥加金銀高也

金三千百八拾兩

又銀貳百拾三貫六百六拾五匁

六金ニ凡貳千三百四拾六匁

七拾貳軒分

合五千五百貳拾六兩有

右百八人より差上候惣高

凡金貳萬貳千貳百兩餘

三郷町々并諸仲間等より差上候高左之通

北組 銀 貳百七拾貫目餘

三郷合

南組 貳百八拾貫目餘

五百九拾貫目餘

天満 四拾貫目餘

右同斷ニ付町々より御冥加金奉差上候者三郷町々并諸仲間自分等夥敷事ニ相成追々書附を以申上候則私掛り町々右ノ高之内ニ而

一銀拾枚

南組 南米屋町丁中

一銀百五拾目

同 借屋人中

一金貳兩

同年寄 大黒屋利兵衛より

一銀壹枚

同 天香榮藏より

一銀三枚

北組 本堺町丁中より

一同五枚

同 河内屋儀助より

一同三枚

同 津國屋清右衛門より

一銀三枚

北組 本京橋町丁中より

一同三枚

同 鎌屋半兵衛より

右指上候ニ付三月六日西様於 御前奇持^(特)之旨 御譽被爲 成下候事左之通御演舌被爲在候上四月十四日ニ惣會所

に上納いたし候

此度淀川筋其外市中川々御救渡被 仰出候段全土地繁榮諸民御救之儀与御仁惠之程難有奉存冥加之に

めとして夫々金銀高差上其上浚土砂等をも申請度旨申立候段寄持^(命特)之志ニ付譽置候

猶右之趣江戸表にも可申上候

攝陽奇觀 卷之五十六ノ内 『天保山之部』

三月六日

同三月八日より浚方爲御手始与安治川口并南は道頓堀川九郎右衛門町濱先御浚方始り安治川口ニ而は浚土砂捨方壹番の杭鯖の尾南手へ砂捨場ニ相成候ニ付町々より捨方御加勢人足差出し度もの共ハ惣年寄迄勝手次第相斷人數之割方を以日取相定可遣旨御達有之候ニ付本町邊より長堀迄之南組町々上本町邊等最寄々々ニ而人足少々宛差出御加勢致し候事ニ相成候

右ニ付安治川捨場所の郷々引受場之柱立致候事圖のごとし

檜 八寸角 立三間

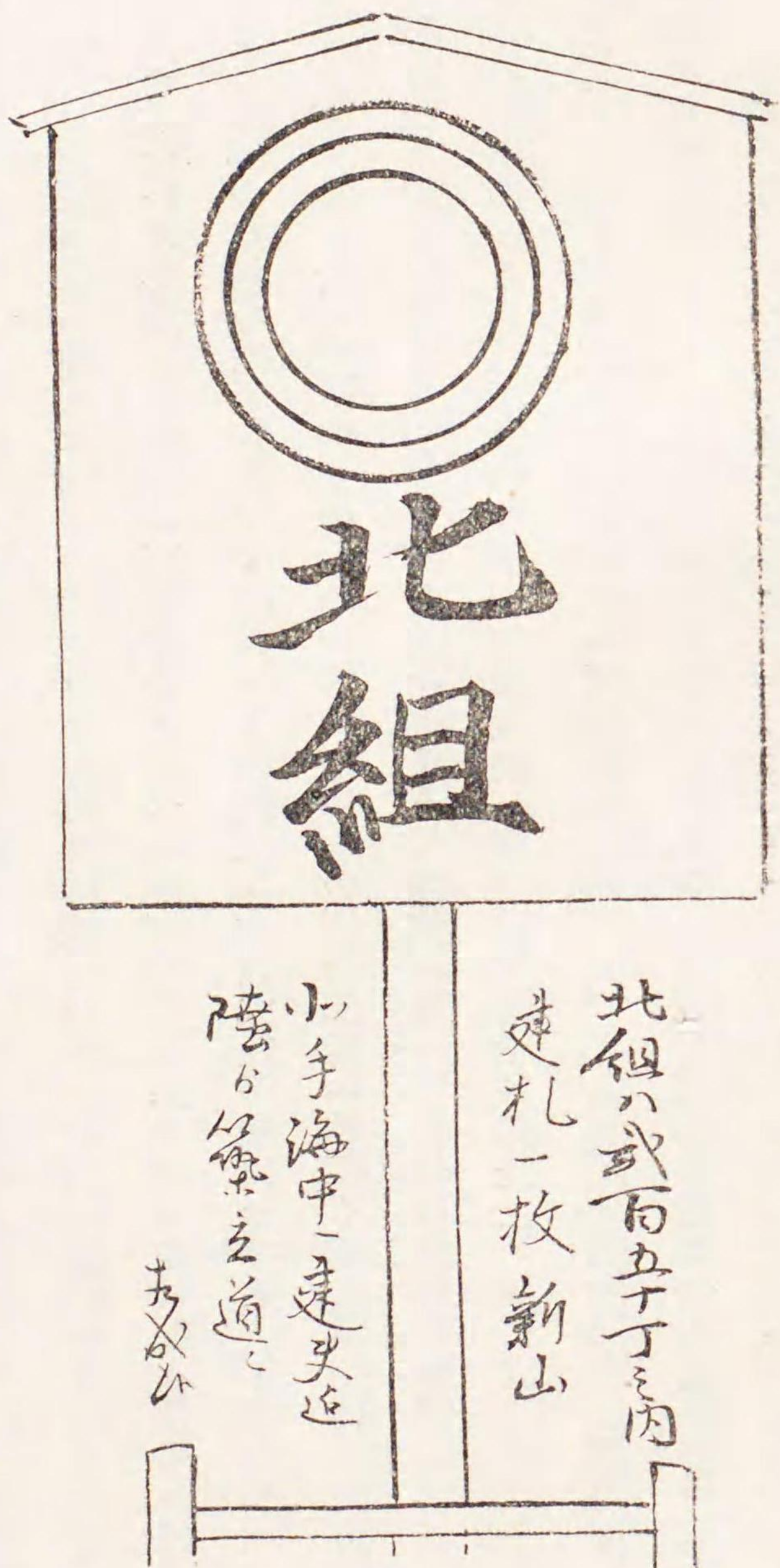


筆者鍛冶屋町一丁目 年寄 天王寺屋次良兵衛

前書南米屋町七丁目頂戴土砂三月十四日より御揚ヶ被成候趣ニ付道頓堀九郎右衛門町濱の七丁組御年寄行司袴ニ而丁代共股引ニ而出勤いたし請負人足頭黒鋳屋張屋磯七壹坪六匁五分ツ、ニ而取捨申付候所角力場近邊取除埋方致候事同二十日ニ而不残頂戴相濟申候事

此土砂上ヶ中南組惣年寄井岡様野里様出勤ニ相當り候折柄年寄丁代より見舞ニ菓子上候事

北組六丁ニ而貳百坪廿日より廿三日迄ニ新川入堀の御上ヶ被成下候右土砂貳百坪は黒鋳磯七の相渡し壹坪ニ付四



天保組の新山南手角杭建堂の辺一組より
一目の山を築立の島越町高野町南長屋町

又五分ツ、都合相濟候上金百疋心附出ス尤此土砂壹坪三匁宛ニ而相渡し候所實ニ不引合之趣相歎候間四匁五分ツ、ニ直シ遺候へ共元來此磯七と申仁難波新地ニ住居いたし其後高津新地九丁目變宅いたし候元來馴染ニ付此度之土砂請負申付候是市中土砂引受之初ニ付追々外町へ相聞皆磯七と申既ニ銀高貳百九拾貫目餘之請負致し候由全ク此方開發成として大悅致シ右之通下直ニ受取候義ニ御座候事

北組ニ而も永瀬様出勤之日舟中へ見舞上候事外ニ日本橋邊は場所違ひ候ニ付追々可被下候事

安治川口御加勢天滿組南組三月中旬より町々人足差出し候ニ付追々諸仲開御加勢出多人數半天股引之揃ひ致し紅摺藍染好ミニ而腰ニ大小鈴或は鳴子杯附走り歩行樽又は籠ニ而場所之上ケ土砂を海手ニ運送いたし兩郷競合數度人數日増ニ增長いたし此人足市中ニ而足揃ひト唱へ茶屋町杯別而大勢踊り歩行賑々敷事ニ相成候ニ付北組へも四月三日より惣郷中日割を以千餘人ツ、毎日ノ仰山成ル吹貫大幟等船印ヲ押立ノ鉦太鼓ニ而囃子往古船中ニ而チウノと恰も天神祭りの如く安治川口川中の賑ひ筆紙ニ盡難く南安治川より島屋新田八幡屋新田堤々之掛茶店軒並ニ出來見物之老若男女櫛の齒を曳ことく夥敷事堤にて人の行違ひも不相成事誠ニ波除山を築候節は遠き昔語りニ申傳へる而已享保六年兩川口御凌被 仰付候所同十月御差止メニ相成同十五年戊五月十二日江戸表より御下知ニ付安治川口水尾凌大坂石錢にて凌候様安治川十三丁目より願之通御聞届三郷町々へも出銀被 仰付其後又々寶曆九年卯五月廿八日より兩川口凌普請ニ付同日より五月晦日迄諸廻舟他國共石錢取立凌方被仰付同閏七月十七日釣船網舟等通船御普請中御差留被仰付候砌等兩三度も川口凌方有之候へ共此度之如く賑々敷事ハ古今未(曾)有之事ニ御座候

四月十一日北組通達十六丁之人足出方吹貫色々押立陣笠ゆかけ揃ひ与黑鍬貳百人召れ二丁餘之海手砂運ひ地方ニ築立候油町三丁目日本橋壹二長町七丁目内出人木綿白地ニ茶藍ニ而蛇之目中形摺込半天股引日本橋四丁目紫白三枳嶋揃ひ同五丁目茶白大格子嶋本堺町本京橋町本相生町此三町鬱金木綿ニ而唐子仕立之揃ひ坂町は茶屋置屋藝者と三段ニ揃ひ分り人數十六丁ニ而凡二千人斗上荷舟數五十餘艘未明より道頓堀川に左之印押立ノ

右之外豆藏花籠花車熊手或は玉屋町ハ銀の玉ニ矢の打違龜井町ハ井筒に龜伏見兩替町ハ分銅小判或は石橋の仕出し中津町羽衣ニ松關町大鈴白銀町ハ銀封山崎町菜種ニ蝶々岩田町南字網島町鯉の瀧登り其外町々我一と競ひたて十日も已前より辻々ニ此吹貫并臺提灯凌道具揃り立祭禮宮本のごとく大丸小橋屋切賣ニ出町々老若男女人氣立騒キ賑々敷事ニ御座候事

扱又町々寄借屋末々迄股引半天手拭等丁人より差遣し候も有之南米屋町ハ鬱金木綿一反三切襷并茶染手拭壹ツツ、差遣し候半天股引は銘々求メ南地三丁ハ手拭壹筋ツ、遣し候而已夫ニ而も凡貳丁ニ而貳百筋相生町分百餘も染申候此節は更紗摺込職晝夜を不分混雜致し候人足出方之時ハ借屋人ハこめし或ハ割籠辨當年寄自分ニ出され候も有之町内掛りニ辨當賄ひ候分も多ク出勤無滞相濟候上ニ而樂作參會いたし候町々も不少誠ニ臨時之事ニ而市中多分之物入相掛り候事前代未聞之事共ニ御座候

此節御加勢ニ出候人足揃ひを着し當日前後共市中を踊歩行外町之踊ニ行逢ひ候時ハ雙方挨拶いたし手を打分る、



此の鳥は
油河の舟の舟に付て河を舟は色は白く
上は白く下は黒く其の羽は長く
鳥の尾は長く色は白く
此の鳥は見ると其の羽は長く
中津河の羽衣も此の鳥の羽衣



此の魚は
大鯉魚と申す
此の魚は
此の魚は
此の魚は

事おかしき風俗也

四月七日御口達

此節安治川口土砂捨場の町々より御手傳人足差出又は場所及見として罷越候ニ付船賃直上ケ不致様其筋々
え可申聞旨被 仰出相達シ置候聞於町々右之趣可被相心得候

大凌掛り 惣年寄

右御觸迄は茶船家形貳貫五百文位其外諸舟右ニ順し高直ニ候所此御觸ニ付茶舟常之通九百文位相成候難有事ニ御
座候

安治川口御凌場御手傳ニ罷出候人足砂運候節四斗樽杯え長キ棒を附大勢相懸り持運ひ候向多ク有之甚あふ
なく候間何桶ニ入レ候而も四人懸り之外大勢相懸り候義決而不相成候間此段罷出候人足共得与申諭可被
差出候且又運ひ桶ニ長キ繩を附引歩行候儀是又決而相止メ候様申付可被差出候
一人足着類絹物一切相用候儀差留可被申候以上

大凌懸り 南組 惣年寄

安治川口土砂捨場の御手傳人足仲開者与申唱押掛ケ場所へ罷出候向も有之土砂取場并捨場とも多人數ニ相
成混雜而已ニ候間右之儀無之様町々ニ而篤与可被申聞置候様致度候
右罷出候人足當日前後共遊所は勿論他所の罷越踊歩行候儀決而致聞敷様可申聞候

一 吹貫并目印等追々大造成品物等細工致候向も有之哉ニ相聞右は畢竟町々之目印ニ付小轆杯ニも可相濟事ニ付
精々大造成儀無之様其丁々篤与可被申談候以上

大凌懸り 惣年寄

今日南組惣會所の立慶町惣右衛門御召出之上歌舞妓役者之者共爲御加勢罷出候様相聞候ニ付決而役者之分
は不相成候様被 仰付候右兩町の役者有之丁々此段可相達候様被 仰付猶又役者遊參舟ニ罷出候事も不
相成候趣其町々より可爲相止候以上

四月十九日

右兩町より

吉左衛門町九郎右衛門町難波新地三丁替地三丁高津新地九丁

此節角の芝居伊勢物語狂言興行中ニ而樂屋中は歌右衛門より仕着せ之由ニ而木綿紅摺孔雀三郎之肉染半天揃ひ其
外表方々々相揃ひ嵐舎丸淺尾國五郎拍木子を打頭取惣座中御手傳ニ罷出候足揃ひ連四月十九日芝居近邊を踊歩行
候處夕方右之御達シ有之急ニ相止候事尤此風聞追々安治川邊の相聞候ニ付棧敷掛茶屋等立慶町之出勤日ニは見物
殊外賑ひ候由及承候

卯四月廿日急御觸寫

此度淀川筋御救大凌御手始与して安治川口より御凌被 仰付候ニ付爲御冥加奉願上候上三郷町々より人數

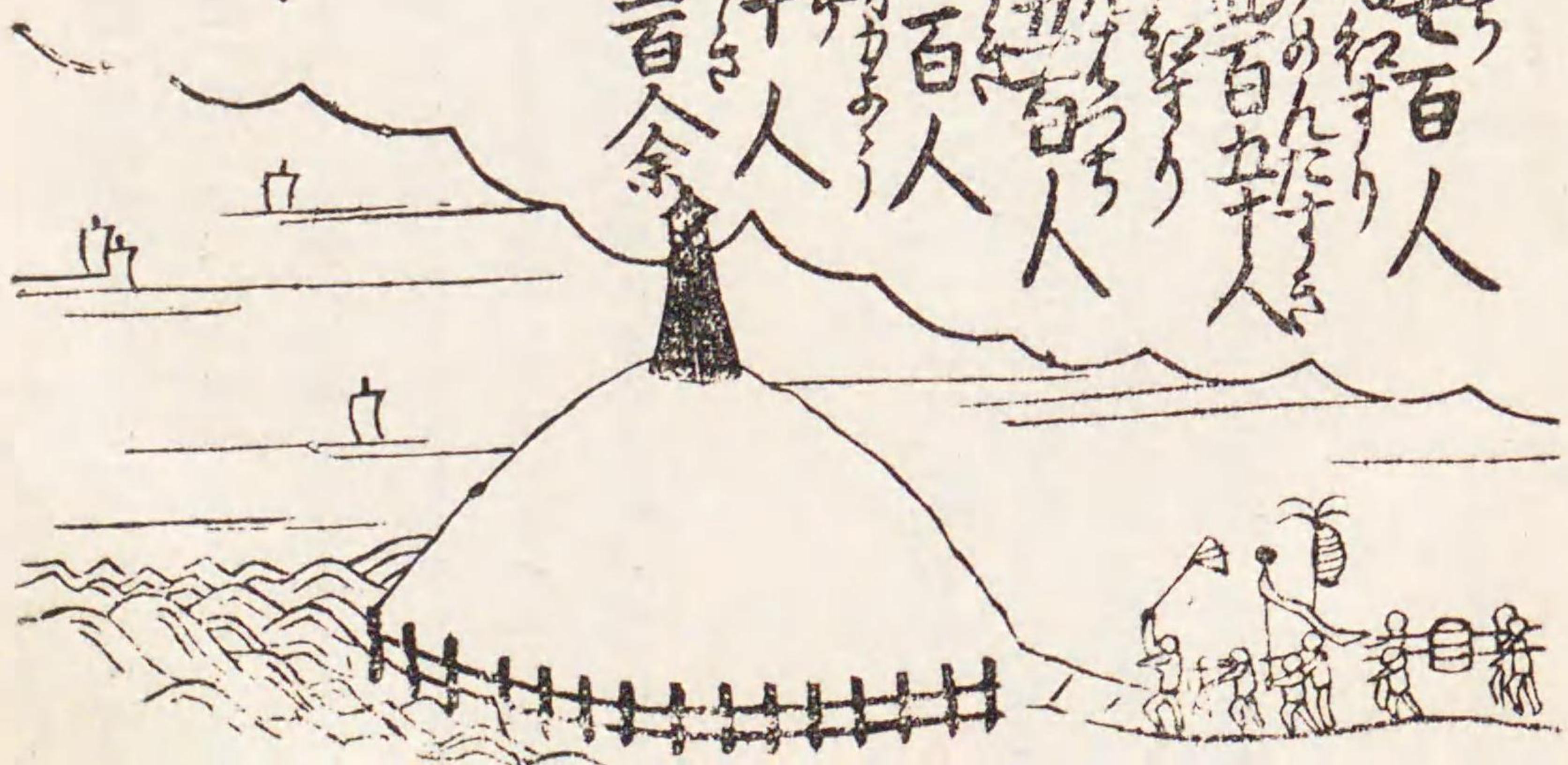
大坂町中 御砂持組

堂上 白きおん人 七百人
 上町六 堂上 白きおん人 七百人
 玉造 七組 白きおん人 七百人
 伏見 御砂持組 七百人
 北新地 御砂持組 七百人
 津村 御砂持組 七百人
 石ま 御砂持組 七百人
 南テ 御砂持組 七百人
 甘んを すめおん人 七百人



白子テ 百七十八人
 坂町 蛇目 百七十八人
 系中 蛇目 百七十八人
 てんは 蛇目 百七十八人
 大川筋 蛇目 百七十八人
 徳内 蛇目 百七十八人
 さふら 蛇目 百七十八人
 新町 蛇目 百七十八人

は外町へ行くはかきす
 思ひくのかしらにわらうの
 浪身は進るおちれ人のうらま
 町数九七百余町也



差出し土砂持御手傳申上候所御場廣之義ニ付働人足足並相揃ひ候ため又は休足知らせ旁太鼓打申度願上相
 用候所追々増長いたし土砂持御場所ニ不限往返之船中は勿論御手傳ニ罷出候町々足揃与唱へ兩三日前より
 銘々揃之繕件(絆)ばつち等を着シ壹丁限り大造之目印吹拔を拵鉦太鼓にて囃子立大勢町中徘徊いたし且又御普
 請所ニ而も御場所柄をも不辨神奈祭禮同様ニ相心得無益ニ騒立全ク御普請向御手傳申上候趣意を致忘却遊
 興同様ニ土砂持いたし候義は有之間敷心得違之所行思召候間以來實意を以御手傳ニ罷出候者共は神妙ニ相
 働キ前以足揃杯与唱揃(絆)へ繕件(絆)を着大勢町中徘徊いたし仰山成目印等もち歩行候義は致間敷事ニ候間已來心
 得違之者有之候ハ、急度御沙汰も可有之段被仰出候奉恐入候義ニ候間此旨三郷町々末々迄篤与可被申聞候
 事

五月八日晴天南組七丁之人足出高間町木綿市紅茶ニ紺ニ而大釘貫之摺込紅黄鈴のもやうの股引人数百廿人斗り山
 崎町木綿紺紅三筋鳥襷の模様人数貳百人斗白銀町南米屋町木綿紅相櫻花中形半天股引揃ひ都合人数百八十八人斗九
 之助町壹丁目同貳丁目牡丹之紅摺人数三百餘人關町花色地ニ紅ニてほたんの花人数七十人斗七丁ニ而都合九百人
 斗り并南竹屋町六丁組与同日ニ相成七丁年寄衆御納戸葛布之袴揃ひ丁代下役蒔黄白立縞半天ニ而揃ひ最早此節太
 鼓鉦御差止ニ候得共矢張船中ニ而叩立往返致し候無滞相濟申候

今十五日五ツ時西寄會所の掛り町御呼出之上川崎次左衛門様左之通被 仰渡候

一 昨十四日東御奉行様安治川口被遊御見分郷中請持地所砂運ひ築立テ町々出精いたし候段御稱美御詞被下候
 段組合町々の可被存難有不洩様相達可申段被仰渡候
 此後西様よりモ同様被仰渡有之候へ共略文

右之通土砂一件五月切ニ而當組合南北共中休ミ又々七八月頃罷出候様之日順ニ付組々掛り町御年寄御苦勞之趣御
 禮与して福屋ニ而七丁組は五月廿日參會催シ十六丁組は同廿三日參會相催し本堺町本京橋町兩丁新年寄より藝子
 五人進物ニ被致丁代下役夫々藝盡し有之誠ニ賑敷おかしき事共近年の鬱散いたし候

寄 川 浚 戀

よし浮名たつともまゝの川浚ふかく契りし君と我中
 かくまてにほれてや口説言の葉を砂になしたる君ぞ恨めし

落 咄 し 豊 年 祝

此頃川浚の御加勢に出る人ハ皆々腰へ大きな鈴を付て行があれハ何のために鈴を付るのじや 若イ衆あれハ大海の
 はたへ行時ハ鯨じやのさめじやのと大きな魚などが出て驚く事があるゆへその魔よけに鈴を付けるのじや神前の
 鈴も同じ事じやテ 或人いやくそふでハない毎日く砂場へ行と日にやけるよつて色が黒ふなると夜に入つて人

に行當るとわるいから鈴を付るてふと纏に鈴を付るとおなし事じやと二人あらそふている所へ老人來かゝり
コレ 貴様たちの思ふ所の一理有なれど中々そのやうなちいさき事じやないわいの 兩人ハテそんならどふいふわけ
で鈴を付ますな 老 あれハ兩川口を御凌なさると諸廻舟が入來りむかしの浪花津にひとしく大坂が賑ふてソレ世の
中がよふなるといふ事じや
能成

加 藤 清 正

唐物仲間之者大せいフラタ、毛せん、らしや、羅脊板杯にてりつばなる出立の人足衆誠の唐人かとおもはれるほ
どの事黒すの出立取分てよふ出來町々踊歩行當日になりて安治川口へ御手傳に行のを見物にいたれば何ゆへにか
唐人皆々にけて歸りければ扱ハあまり大造成ルこしらへじやよつて御とがめにあふたのであらふといへバイエ
ノ、そうじやないならば新地の人數ニおそれたのじや ソレハまたとふして ハテ蛇の目の揃ひじや

右御川凌一件西様御壹人役人之砌發起御城代太田備後守様より松平伊豆守様迄町御奉行西新見伊賀守様東曾根日
向守様御代官辻六良左衛門様岸本凌ニ矢嶋藤藏様其外略ス

爾時天保二辛卯六月朔日迄從是後編ニ記

右川凌御褒美として三郷町中へ銀五百枚被下置掛り與力衆安東三郎兵衛内山藤三郎由比一郎助磯矢與兵衛四人へ
時服同心衆へ夫々御褒美被下候事

天保五年二月九日

天保三年 辰八月より

一 八月小 亥晴天

一 當秋登り御加番川支ニ而御延引之事

一 十三日 西御番所邊之空上にて鳶一羽古ふどしをくわへて飛行所へ鳶數多追付空にて舞ながら右之ふどしをくわへ合互ニいどみ夥數鳶數ニ相成凡半時餘りせり合終ニ東の方へくわへながら飛行何方へ落し候哉行衛不知珍敷事ニ御座候

一 同日 御本丸桂女安産守り町々へ配札被仰付候事

一 同日 難波新地貳丁目中村屋市右衛門借屋ニ而蜜夫之疑ニ而刃傷有之候處疵養生之上無事故相濟

一 九月大 辰の朔日晴天

一 市川鰻十郎後家死去 新町扇大ちどりと申藝子
行年六十三歳

一 六日 傳法邊舟火事夜中頃

一 泉州一ノ宮大鳥御免勸化町々巡行

一分銅御改此節也

一十四日 大角舩初日大關真力ニ鋸 勸進元藤島岩右衛門難波新地角力場ニ而不評

一廿一日 獄門三首 強盜無宿勝藏 十九歳 京の藤吉 西岡の庄藏

一晦日 江戸御老中屋敷火事人死少々有之

一十月小 戌の朔日晴天

一六日 琉球人迎舟足揃ニ付川口御役所エ漕入ル事

小笠原大膳太夫 松浦肥前守 龜井隱岐守

右三家鈔舟美々鋪供船數艘賑鋪事ニ候

一十一日 火罪 鳶田ニおゐて河州山形村善四郎 四十九歳 家業酒屋ニ而同商賣遺恨有之候由ニ御座候

一十三日 東御奉行戸塚備前守様大坂御着之事十人目附

一十八日 金貳朱判通用御觸有之

一十九日 中村歌右衛門悴橋之助死去葬賑敷事ニ候

一廿二日 琉球人大坂着岸之事廿四日江戸に發足



一 十一月大 卯の朔日晴天 住吉山口祭今巳ノ刻是ハ此度四社御修復ニ付材木切出し候山を祭
る事ニ候由

一 八日 夜五ツ時頃高津五右衛門町江戸餅屋二階より出火 東西半町程類焼東南辻より丁境迄西は絲
屋迄焼ル

一 同日 日本橋河德舟之水子中嶋ニ而畑中の大根を引百性ニ被捕登り舟被留大ニ混雜致し舟
宿へ急使來候處右近火最中ニ而困り入八軒家仲間へ申遣シ漸夜明方ニ相濟

一 十一日 日本橋四丁目年寄河内屋長右衛門借屋之夜蕎麥賣商人難波村御藏前畑ニ而毎夜葱堀
盜候ニ付百性待臥セ致し昨夜捕候由叶橋西詰野あらし杭へ活（金）り付置丁内之者呼寄彼是混雜致
し候漸誤挨拶ニ而晝時頃免し歸ス事

一 十九日 長町七丁目兩替屋山家屋勘右衛門居宅土藏へ夜中盜賊這入候哉穴藏ニ入置候金子百
十七兩銀貳貫五百匁紛失致し其場ニ刀一腰鍵繩捨有之候 早々御訴申上候處嚴敷御手當ニ相成長町
一夜泊り之者御證儀有之候得共手懸り無之漸相知候處右兩替屋別家手代庄助ニ御座候此者日勤致し至極實體
ニ御座候處何故ニ候哉右之始末ニ及主人より命乞願被致候處三日入（等）牽之上所預ケニ相成御吟味之上金銀等は
算用中入込ニ相成未決算不致候を被盜取候与主人龜忽之儀ヲ訴出全誤入尤刀も實物ニ取置候品ニ付彼是間違

ニ而雙方御叱り之濟口ニ相成庄助身分無別條ニ相濟候誠ニ珍敷御憐愍之事西様御懸り内山彦次郎様ニ御座候
此内山彦次郎様事佛神之様ニ三郷町中歸依致候慈悲深キ盜賊方ニ御座候

一 廿二日 若太夫芝居小屋ニ而坂町藝者素人芝居興行兩日有之尤役木戸泉利隱居之合力芝居ニ
御座候大當り

一 廿九日 元伏見坂町伏見屋善兵衛下人何者共不知往來人ニ手疵被負候事相手不知

一 閏十一月大 酉の朔日雨天

一 四日 鳶田ニ而火罪有之播州之多藏 廿六歳

一 辰閏十一月四日 琉球人御禮ニ付溜閒酒井河内守松平刑部少輔并御譜代大名高家御奏者番菊
ノ閉縁頼詰嫡子とも布衣以上法印法眼御醫者登城已上刻大廣閉ニ出御

御目見 松平大隅守 松平豊後守

中山王使者 豊見城王子 前中王使者 釋紙親方

於下段御目見九拜畢而自ら御禮於板椽奉三拜畢而

獻上卷物ニ銀馬代 嶋津但馬

右御目見へ相濟御襖之障子開キ御次ニ伺公（候）之面々一同御目見へ

中山王獻上

- 一 御太刀 一腰 一 御馬代 銀五十枚 一 青貝中央卓 二脚
- 一 石ノ人形 二體 一 飯籠 一對 一 鳴芭蕉布 五十反
- 一 煉芭蕉布 五十反 一 太平布 百疋 一 衆鳴綿 百抱
- 一 泡盛酒 五壺
- 以上

前中王獻上

- 一 御太刀 一腰 一 御馬代 銀五十枚 一 青貝硯箱 一通
- 一 石人形 一體 一 煉芭蕉布 三十反 一 薄ばせう布 三十反
- 一 衆鳴綿 三十抱 一 泡盛酒 三壺 一 太平布 三十疋
- 以上

拜領物

- 銀五百枚 綿五百抱 中山王に
- 銀三百枚 綿五百抱 前中王に
- 銀三百枚 惣中の
- 王子自ら獻上

- 一大官香 十抱 一 壽帶香 五 一 嶋芭蕉 十反
- 一 煉芭蕉 十反 一 泡盛酒 二
- 以上

親方自ら獻上

- 一大官香 五 一 嶋ばせう 十 一 泡盛酒 二
- 以上

拜領

- 銀五百枚 時服 十
- 右豊見城王子に
- 銀百枚 時服 五ツ
- 右釋紙親方へ

時服三ツ、 藥師惣中へ

右於大廣間四ノ間ニ老中列座松平和泉守申渡之

一同 七日已上刻大廣間へ 公方様 内府様 出御ニ而琉球人音樂被爲 聞召御暇被仰出候

帝鑑ノ間

松平大隅守 同 豊後守

殿上ノ間下段 豊見城王子

柳之閒

釋紙親方并
惣中從者

蘇鐵之閒 薩州家來

右於席々御酒御菓子被下之供廻り中へ赤飯被下之候事

一 五日 夜江戸堀小火早速鎮ル

一 廿九日 夜四ツ時頃九條村本田堤壹丁半斗り焼失八ツ半頃火消

一 十二月大 卯の朔日雪小降 當冬寒氣廿年已來の嚴寒ニ御座候事

一 七日 地震動巳ノ上刻

一 同日 曉七ツ時頃九條村本田堤先月焼留り之家一棟殘シ西エ又々一町半斗り焼失夜明火鎮ル此殘家曲り角ニ而閉口十間餘り一棟不思儀ニ殘ル

一 九日 大雪降尺餘積ル

一 十一日 難波村八百熊与申者念佛ニ而咒病いたし候ニ付怪敷風聞有之今朝被召捕入牢候事一兩日過赦免急度御叱りニ相成候

一 十九日 尾州御簾中様御逝去ニ付在領斗り三日鳴物御停止之事

一 廿八日 江戸増上寺富京都ニ而興行之札於當地賣捌キ御免之御觸有之

當辰年中 晴天 貳百九十四日 雨天 五十日 半降 四十日

三百八十四日

天保四年 癸巳

- 一 正月小 酉の元日上々吉晴天
- 一 二日 巳ノ刻より雪降
- 一 三日 晴天右三箇日靜謐ニ而目出度申納候
- 一 七日 北三軒家之茶立女今宮村石橋際ニ而殺し有之三日肆の上相分り死骸假片付相手紙屋ニ而行衛不知
- 一 十日 戎參り兩日晴天ニ而賑敷事ニ御座候
- 一 十八日 琉球人從江戸歸坂木津川口ニ泊舟
- 一 廿三日 日本橋南詰ニ而三日肆有之左之通

河州高安郡黑谷村半銅寺留守居

尼 惠 輪

五十二歳

當時無宿快雲事

や い

三十七歳

右やい義住持大詞之子を産ながら殺し寺内へ埋ミ還俗いたし乳母奉公ニ出惠輪媒いたし候義大詞之申旨ニ同意致不届至極ニ付肆之上三郷拂

一 廿七日 強盜獄門 無宿徳利之佐吉 三十三歳

一 二月大 寅の朔日晴天

一 五日 初午之處先年亥年二月五日大西焼七回忌正當ニ付惣芝居より湯神樂上申候事

一 十一日 高麗橋東詰ニ而三日肆有之左之通

當時無宿

竹萬事 萬 助

已三十六歳

此者義專藏方へ日雇中人女房きさ^(密)と蜜通いたし自分女房まな^(密)ハ相對之上及離別候後渡世之妨ニ相成候迎不顧不仁實子を捨前書きさ申合致脱落一旦手切ニ及ながら再應同人^(密)の蜜通申懸候節きさ自分不詰之次第ニ品を付專藏病中を幸ニ毒藥を用ひ同人相果候ハ、心之儘ニ可及蜜通^(密)旨きさへ申勸爲致同意候上及蜜會^(密)其後きさ義いよく專藏を疎敷存候迎此者差圖ニ隨ひ竊毒藥を粥ニ取交專藏を毒殺ニ及候仕義ニ至候段此者仕業を以元雇主を毒殺ニいたし候も同然ニ而其上きさ方^(密)の心之儘ニ立入及蜜會^(密)居候始末重々不届ニ付肆ニ申付者也

但シ同十四日三日肆之上蔦田御仕置場ニおゐて磔ニ相成候き事は妊身入牢中牢死致候由ニ御座候

一同 日 賈一朱致候者野江ニおいて磔ニ相成候事

一 廿三日 紀州様御國より江戸出府被遊堺筋御通行

一 廿六日 曉七ツ過ふかり湊町出火難波村道筋迄焼込半町程類焼五ツ比鎮ル

一 廿八日 穀堀三軒屋小火未明鎮ル

當月二日江戸於高田馬場流鏑馬有之

内府様御厄年ニ付被仰付候御名代本郷丹後守殿被爲入事

右ニ付初矢一本射損し見物之婦人怪我いたし候

一同 廿七日 勅使江戸御着三月朔日御對顔三日御返答五日御能七日御暇被仰候事

智恩院方丈 東御門跡共々御參向

一同 日 千三郎君二丸へ御居移

一 三月小 申の朔日晴天 難波新地野側ニおゐて見世物賑敷御座候

人形細工富士裾野行列 能場ニおゐて

足藝 大當り

子供力持

戎鯛釣 人形之戎ニ生魚舟ニ魚を入置釣上ケ見物へ圍取ニ而遣ス

舞子三人上戸

山あらし諸鳥類

五十三次風景人形細工

松の尾南庭ニ白絲の瀧

花相撲野側ニ而一日宛有之

三月朔日 石火矢庄吉 四日 高崎市右衛門 六日 千田川吉兵衛 いづれも追善角力評よし

一 三日 日 中山寺本尊今日より五十日之閉居開帳有之

一 十三日 元堺奉行久世伊勢守家來暇出候伊藤清十郎事當時御城中御目附山本七郎右衛門家來

ニ相成候もの不届有之被召捕江戸表御下知ニ依て駕ニ乗せ三郷引廻し之上蔦田ニ而磔ニ相成

候事捨札之寫左に有之○印

〔編者曰ク原本イヅコニモ此ノ捨札ノ寫シナシ〕

一 廿四日 夜子の刻頃初雷鳴翌朝大ニ鳴一聲

一 廿七日 京小松谷正林寺本尊圓光大師五十日之閉開帳千日村竹林寺ニおゐて大ニ評よく流行

浪華津に

三國起原に英傑勇子が

さくや此はな

義を結合たるハ巴蜀の桃菌

冬こもり今を

春野に咲や

難在東寺利生記

此梅もさくら茂

散とて

四國遍路に伯姪親子が

珍説

再巡り逢たるハ新道の桃畑

桃李ものいはすして人を呼とや茲に大坂日本橋五丁目中程より下寺町へ行新道の桃畑に躰の乞食車家臺に乗り住居致し候處に古き乞食のいざりなり此頃十四五歳斗之坊主乞食來り右躰に小使いたし往來の人を見かけてハ躰に御報謝と袖袂へすがり一錢の志を請て躰と等稼いたし或は近所の塵芥を掃除仕又ハ傘干場の出入杯急雨暴風の節手傳致すゆへ近所にも實體の子坊主醉な者じやとて金柑〱と異名して米錢又ハ食物を與へ遣しける其躰の邊りへ先月年頃四十餘りの女非人六歳ト三歳の女子を貳人抱へて母子三人連にて徘徊來りしを桃畑へ野宿させ此婦人病氣ニて歩行成かたきゆへ已前の躰と等に彼金柑小僧袖乞して養ひながら稼居たりしを近所の衆中不便に思ハれ婦人の乞食にむかひ衆 貴様の腹からの乞食とも見へぬが一體どふして此光景じやぞと問ハ女 ハイ御推量の通り私ハ昨年夫婦の中へ此二人の子をつれ四國參りに出亭主に死別れ據なく子供を連て乞食となり下り此間迄南の宿やに居ましたが病氣に取合せ宿錢ハ盡て宿屋をも放離出され此所へ參り一足も歩行成かたく行腦惱此衆達の世話に相成いさりと居ますと聞て衆 扱々氣之毒千萬全體生國ハ何國で家ハないかや女 家ハ元より少しの家財まで賣拂四國へ出ました元來京都三條の堀川で紺屋商賣致せしが商賣向たけを甥にゆづり出候ひしかかやふの風體ゆへ京都へも立寄かたく候と答ける衆 ムウそんなら其甥といふハ今商賣をして居らるゝならマア知らせて見たら眞さら取合ぬ事も有まい名前ハなんといふそと京都三條堀川にて何かしといふ事委敷尋ね近所の衆中より人を雇ひ飛脚に仕立知せ遣しける京都の甥ハ此飛脚を得ると大ニ驚き扱も〱御心切の御世話被下忝存候片時も早く迎に參り可申与右之飛脚と同道して大坂へ下るに決着せし時紺屋の手間職人五十歳斗りの男有しが病人子供の迎に甥壹人にてハ覺束なし我等も同道いたし可申哉と申ける故甥なる男大ニ悦ひ然らハ同道下さるへしと甥と職

人と右之飛脚に連達三人先月廿九日道頓堀へ舟上りいたし即刻五丁目の新道衆中の方へ飛脚の案内にまかせて同道いたしけれハ衆中も大ニ悦び先々早東相知れ下られしにて此方とも世話甲斐ありて嬉しきそと件の女乞食に知らせ遣し雙方對面させ伯母甥の名乗より四國已來伯父の病死種々艱難の物かたり數刻移りいよ／＼京都へ迎上るに治定せしが風俗見苦敷ゆへ近所の風呂屋岩井湯より湯を貰ひ婦人子供二人とも浴湯させ甥と職人兩人して古き單物など求め着せ替尤病氣のことなれば舟にも乗かたし近所の衆中を頼み古き戸板を求め母子三人を乗せ宿送りのやうに仕立賃錢三貫文にて京都迄約束いたし連行事といなりぬ扱近所の衆中へ一禮述たる所へ衆中いやモウ此方とも世話ハ格別あれなる璧りまたアノ金柑子僧こそ實に成かたき世話を致したれば能々禮申されよと教へられ京都の甥と職人兩人桃畑へ行覽と子僧とに段々の御世話一方ならず千萬忝奉存候是ハ聊なれと買物の残り錢御禮の印までにと差出すを彼金柑子僧に押戴きは／＼有かたふ存升と云ひツ、仰顔京都より來りし五十斗之職人を見てヤアおまへハ爺さまじやアないか職人ヤアそふ云ふハ悴か金爺さまか職人悴か扱も／＼よふ無事て居てたもつたノウ金逢たかつたノヲ、／＼道理じや／＼と互に泪さき立て件の職人金柑坊主を抱よせて聲もおします嬉し泣泪は落て地をひたし様子知らねど親子の再會思ひやられて衆人も袂を絞り袖ぬらし數刻言葉もなかりしか衆人は是々金柑一體又とふした譯か一圓わからぬが定て深き子細も有へしマアこちへと近所の家居へともないて始末を尋ねとひける職人御不審ハ御尤元來我等加賀の國の者なるが國元にて身代を仕廻イ夫婦の中は是なる一人の男子をつれ京都へ登り少しの知るへを尋ねて出たるハ去年の今頃にて其節京都にて此悴迷子といたし所々方々再三再四尋たれとも行衛知れず此大坂へも兩度まで尋候へとも相知れ申さぬゆへ自然國元もや

と本國へも立歸り尋候へとも知ぬことゆへ出たる日を命日と定め念佛申より外他事なく候へとも母親なる者女の愚智より諦得ず其頃より悴の行衛知らしめ玉へと東寺の大師さまへ今日の今迄日參して祈願いたし候誠に大師の御利益にてか再び巡り會し事偏に佛の應護各様の御蔭なりと泪なから物語り扱も／＼不思議なる事ともなり正敷四國遍路といひ東寺への日參信心の感應する所弘法大師の御利益にうたかひなしとて衆人力を添て此頃まで信々敷働きし金柑子僧古郷への錦を鏝る事ハならずともせめての饑別にと近所衆中少々ツ、の錢を貰ひ集是にも衣服着替させ婦人伯姪都合四人再會の親子とも六人の人々を京都へと見送り目出度門出を祝しける

天保四年巳四月廿九日の事ニ御座候誠ニもつて難有御利益信あれハ徳ありと申事空しからす依之記し置者也

插图并ジントク版目次

文政元年五月勸進相撲番附—(2—6)	瓦直段正味銀定—(8—11)	聖徳太子乗馬爲拜—(14—15)
『天竺の僧假寐姿』繪本—(17—22)	説教芝居免許額—(26)	文政二年四月説教芝居番附—(28—29)
文政二年嶋之内遼物番組—(33—38)	いろは歌教訓鑑—(40—45)	紅毛渡り更紗目鏡—(51)
菱垣の施本—(54—75)	御靈境内素人淨瑠璃番附—(80)	庚辰回開運吉祥日辨—(82)
かんく、踊三種—(84—85)	文政三年七月角芝居番附—(90—91)	文政三年一月説教芝居番附—(93)
文政三年十一月興行北新地芝居番附—(94—95)	籠細工『山巡五色曙』繪本—(99—104)	
紅毛細工萬年時計—(107)	『頼政鶴物語』繪番附—(117—123)	文政四年八月北新地芝居番附—(124—125)
文政四年十月興行北新地芝居番附—(126—127)	嵐吉三郎まなず物がたり—(127—130)	
宇佐八幡富札—(156)	奇縁氷人石—(157)	籠細工『漢倭強勇士籠編』繪本—(165—170)
だんだらのまじなひ—(172)	文政五年五月興行御靈社奉納寄進芝居番附—(174—175)	
文政五年六月新町ねりもの番組—(178—183)	れんくをどり歌—(196)	
そうひやんをどり歌—(196)	井戸の目印—(201)	疫病よけのまじなひ—(204)
疫病よけの薬法—(205)	流行病をのがるゝ法—(206)	流行病について施薬—(207)
くぢらおんど—(212)	ちよとなぶし—(214)	三人女かえらた—(216—217)

細工もの『大日本神事数見』繪本—(221—225) 聖徳太子奉納物番附—(228—231)
 文政六年五月興行稻荷社内淨瑠璃番附—(234—235) 高祖聖人御杖倒生竹之圖—(240)
 むくゆの世話のちらし—(243) 癩疹の落首—(245) 近松門左衛門略傳—(247—252)
 四季遊覧花のちをり—(260—263) 吉田家の施療治能書—(270) 流行もの邊物番附見立—(274—280)
 開山聖人旅姿の木像—(283) 寶來をどり—(285) 文政七年八月荒木座淨瑠璃番附—(288—289)
 吉田扇四龜の精靈—(折込290—291の中間) 日新堂隆曹の救病廣告—(294)
 日野屋權平の益壽比天膏—(295) 樹下氏道話のちらし—(296) 文政八年正月角芝居番附二種—(302—305)
 文政八年三月興行角芝居番附二種—(306—309) 三代中村歌右衛門一代一世繪番附—(緩込308—309との中間)
 江戸力持番附—(314—315) 大坂力持番附—(316—317) 福神繁花巡り—(318—319)
 難波新地夕涼み小屋芝居番附—(320—324) 岸木く御制札—(324)
 占景盤圖式—(325) 新造船一力丸—(323—329) 濱松歌國の筆蹟—(330)
 再び歌國の筆蹟—(332) 尾上菊五郎七役—(333) 攝陽奇觀第五十一初丁表—(337)
 棒吞太夫小川吉五郎—(341) 新上り江戸力持番附—(342—343) 熊野三山初富の大幟—(348)
 道頓堀の火事—(357—359) 綠鳥—(363) 詔書宜旨の寫—(364—366)
 異體の武士の挑灯—(369) 不退堂社中の大字展觀—(370) 光りもの飛ぶ—(372)
 研辰のうたれ—(374—375) 親不孝のむくひ—(380—381) 車道三の再生文—(382—384)

車氏の墓所供養口上—(385) 不退堂社中の大字展觀—(387) 勸進能の通り札—(393)
 朝鮮産の虎—(396) 文政山—(398) 文政山の記—(399—401)
 文政十一年六月興行勸進相撲番附—(404—407) 文政十二年三月江戸の大火—(416—417)
 西町奉行新見伊勢守の紋印—(419) 松野尾の茶店—(420—421) 片山家能興行の番組—(422)
 筏乗りの海女—(424—425) 白米大安賣の口上—(427) 壺坂觀世音の入佛—(441)
 伊勢參宮の榜示杭—(444) 八歳の子供拔参り—(445—446) おかげ施行次第書—(451—454)
 おかげ参り百人一首—(451—454) おかげまゐり—(456—458) 威徳三郎四郎勸進能番組—(461—466)
 京都大地震—(468—469) 流行のかんざし—(474) 光りもの飛ぶ—(474)
 紋所に當てた狂句—(476) 攝陽奇觀第五十六初丁表—(481) 舞やら番組—(487)
 天保山の記序文—(509—510) 安治川口土砂捨場新山—(511—512) 天保山之記題辭—(513—514)
 高津入堀の建札—(521) 土砂上ヶ場變更—(522) 南組引受築立場所の榜示杭—(536)
 北組建札—(537) 油町二丁目の船印—(540) 西横堀邊の町印—(541)
 大坂町中御加勢砂持番附—(544—545) 琉球人來朝行列—(553)

年	號	干支	紀元	西曆
文政	元年	戊寅	2478	1818
	二年	己卯	2479	1819
	三年	庚辰	2480	1820
	四年	辛巳	2481	1821
	五年	壬午	2482	1822
	六年	癸未	2483	1823
	七年	甲申	2484	1824
	八年	乙酉	2485	1825
	九年	丙戌	2486	1826
	十年	丁亥	2487	1827
	十一年	戊子	2488	1828
	十二年	己丑	2489	1829
天保	元年	庚寅	2490	1830
	二年	辛卯	2491	1831
	三年	壬辰	2492	1832
	四年	癸巳	2493	1833

昭和四年八月廿七日印刷
昭和四年九月二日發行

(非賣品)

編纂校訂者 船越政一郎
大阪市西成區松原通二丁目四三

發行者 江崎政忠
大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内
浪速叢書刊行會代表理事

印刷者 長谷川泰三
大阪市東成區鶴橋南之町一丁目五七八五

印刷所 桃谷印刷株式會社
大阪市東成區鶴橋南之町一丁目五七八五
電話南 三三〇六二番
三七二二番

發行所 浪速叢書刊行會
大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内
電話土佐堀六六二二番
振替口座大阪七七三六三番

浪速叢書

不許
複製

第六

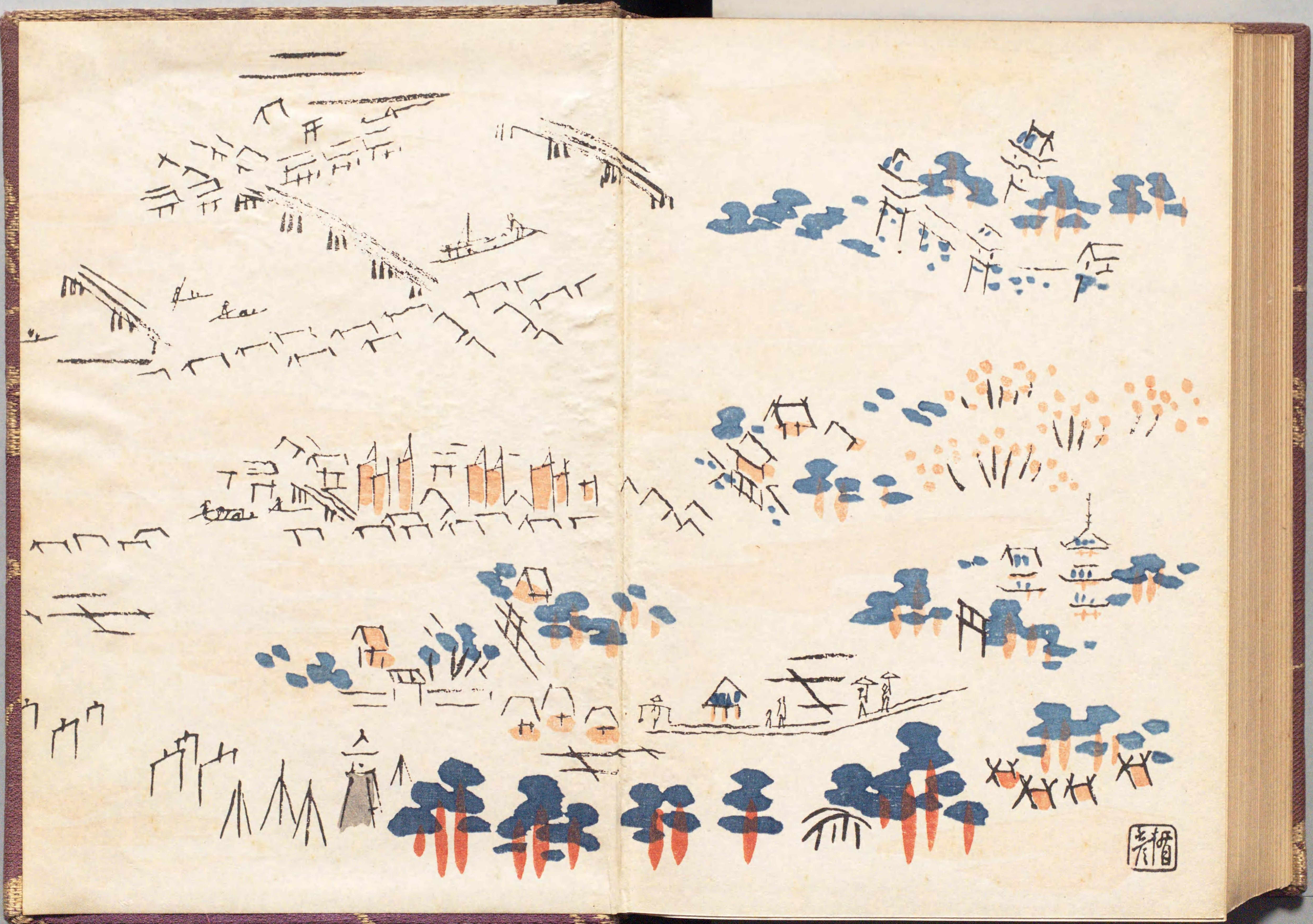
- 一 本叢書は、元和以降この浪速——我等が愛するこの大阪——に關する編著記録のうちから、過去の浪速文化を回顧せしめ、未來の浪速文化を生ましむべき、眞に永遠の價値あるもの——中には未刊行のものが大部分を占めて居ります——を收め、後の世に傳へたい希望の下に着手されたものです。
- 一 本叢書の題字は、帝室御物聖德太子御筆『法華經義疏』の寫眞のうちから求め出したものです。我國に於ける文化工藝の祖におはすばかりか荒陵山四天王寺の創建者として我が浪速との因縁が頗る深い太子の御筆蹟を、我が叢書の題字とすることを得たのは、本書の誇りと考へて居ります。
- 一 本叢書は原本の挿畫を一枚も省略せず、力めて原本の面影を傳へたいと心がけて居ります。
- 一 本叢書の用紙は王子製紙株式會社の別漉紙で、成るべく讀者諸氏の眼の疲勞を軽減したい用意が籠つて居ります。
- 一 本叢書の組版印刷製版製本これらの技術は桃谷印刷株式會社が其の一切を擔任し、及ぶ限りの努力を惜しまないとの意氣です。
- 一 本叢書見返しの畫は、日本畫壇の異彩菅楯彦氏の筆。表紙の布は、我國織物界の偉材龍村平藏氏の意匠に成つたもので、現に我が讀書界に好評噴々たるものがございます。
- 一 本叢書刊行會の理事は伊藤秀雄、林安繁、堀越壽助、室谷鐵腸、小林利昌、江崎政忠、木間瀬策三、森下博、末吉一郎の諸氏。顧問は今井貫一、和田萬吉、幸田成友、内藤虎次郎、内田貢、黑板勝美、藤井乙男、新村出、關一の諸氏。相談役は石割松太郎、橋本耕之介、南木芳太郎、上松寅三、佐古慶三、三宅吉之助の諸氏です。（諸氏の姓名はいづれもいろは順に依る）

浪速叢書

(全十六卷)

所收目錄

第一	攝陽奇觀	第九	大阪商業史資料
第二	攝陽奇觀	第十	大阪訪碑錄
第三	攝陽奇觀	第十一	稿本隨筆集
第四	攝陽奇觀	第十二	地誌
第五	攝陽奇觀	第十三	地誌
第六	攝陽奇觀	第十四	風俗
第七	攝津名所圖會大成	第十五	演藝
第八	攝津名所圖會大成	第十六	索引



春播

